HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<資料紹介>Khlebnikov, Colonial Russian America, 1817-1832
Author(s)	秋月, 俊幸
Citation	スラヴ研究, 22, 241-248
Issue Date	1978-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/5074
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113215.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈資 料 紹 介〉

Colonial Russian America: Kyrill T. Khlebnikov's Reports, 1817-1832. Translated from the Russian by Basil Dmytryshyn and E. A. P. Crownhart-Vaughan. Portland, Oregon Historical Society, 1976

秋 月 俊 幸

18～19世紀中葉における露領アメリカの研究は，近年アメリカ・ソ連・カナダ等の諸国で著しく関心が高まっており，新たな労作が相次いで発表されるほか，過去の古典的著書の複刻・翻訳や未刊の原史料の刊行が着々とすすめられている。ソ連では П. Тихменев, С. В. Окунь, А. И. Андреев, Л. С. Берг, А. В. Ефимов など碩学の後を受けて，航海史・露米会社の植民・北米の民族学に関する研究が盛んであり，ここ数年でもいくつかのユニークな著作が公刊されている[1]。その基礎となっているのはソ連文書館における新たな文書の調査と資料研究の成果である。一方アメリカにおいても最近のロシア研究の進展と米ソの緊張緩和を反映して，従来の文献に基づく豊富な成果に加えてソ連文書資料の直接利用によるオリジナルな研究が始まっている。露領植民地への食料供給をテーマとした J. R. Gibson の歴史地理学的研究はその好例である[2]。もともとアメリカは露領アメリカ本拠地のシトカ文書[3]を所有しており（ワシントン国立文書館），すでに前世紀中にアラスカ史を集大成した H. H. Bancroft や1920年代にソ連文書館のアメリカ関係史料を徹底的に調査した F. A. Golder の二人の大先達を生み出した。近年のアメリカ人研究者によるソ連文書利用の一端は Patricia Grimsted のソ連文書館資料の研究からも窺い知ることができる[4]。Федорова, Макарова, Болховитинов などの著書が刊行から数年のうちに英訳され，また Gibson や Vaughan 夫妻などの論文がソ連で印刷されつつあることは，この分野における米ソ両国の研究者の関心と利益が合致していることを示すものである。か

1) 例えば，Р. В. Макарова. Русские открытия в Тихом океане во второй половине XVIII в. Москва. 1968; С. Г. Федорова. Русское население Аляски и Калифорнии. Москва, 1971; Н. Н. Болховитинов. Русско-Американские отношения, 1815–1832. Москва, 1975; Л. А. Шур (ред.). К бергам нового света: из неопубликованных записков русских путешественников начала XIX века. Москва, 1971.

2) J. R. Gibson. Imperial Russia in frontier America: the changing geography of supply of Russian America, 1784–1867. N. Y.. 1976. これとは逆にロシア人によるアメリカ文書館資料の広範な利用の例は，Болховитинов の著書にみられる。

3) 露米会社の現地資料であるシトカ文書は，1867年露領アメリカの売却のとき合衆国に引渡された。現在ではマイクロ・フイルムがソ連の諸文書館に収められている。(см. Федорова. Указ. соч., стр. 38–39)

4) P. Grimsted. Archives and manuscript repositories in the USSR (Moscow and Leningrad). Princeton, N. J., 1972.

つて Robert Kerner が期待したように[5]，アラスカは少くとも歴史の共同研究に関する限り米ソ友好のかけ橋となりつつあるように思われる。ここに紹介するフレーブニコフ報告書の英訳にも後述するように米ソの協力をみることができるのである。

本書は，1817～1832年に露領アメリカの中心地シトカ支局の管理者を勤めた K. T. フレーブニコフが帰国後本社の理事会に提出した報告書〈Записки К. Хлебников, о Америке〉の既刊部分の英訳である。この報告書はもともと地域別に6部よりなっていたが，そのうち「ノヴオ・アルハンゲリスク」と「ロス植民地」の2部のみが1861年ロシア海軍省の雑誌〈Морской Сборник〉の付録として〈Материалы для истории русских заселений по берегам Восточного океана〉の第3集に収録された。

著者フレーブニコフは露米会社創立の翌年（1800年）この会社に入り，イルクーツク，ペトロパヴロクスクの支局に勤務したのちペテルブルクの本社に移った生えぬきのベテラン社員であった。1817年ハーゲメイステル（Гагемейстер）の第4回世界周航船でシトカ島（現在のバラノフ島）のノヴオ・アルハンゲリスク（現在のシトカ）に到着した彼は，以後15年間この地の管理者としてハーゲメイステルからウランゲリに至る6人の支配人を助けて露領アメリカの経営にあたった。彼の報告書は当時シトカに保管されていた文書を駆使し，自らの多年にわたる経験から書かれたもので，露米会社に関する広汎な事項について記している。それはまさしく露米会社に関するエンサイクロペディアである。勿論彼の露米会社に関する著作はこれにとどまらず，〈Сын отечества〉や〈Северный архив〉その他に印刷されたものがあり，なお多数の草稿がソ連地理学協会文書館や国立中央歴史文書館などに保管されている。近年は彼の生地ペルミその他の文書館で新たな資料が発見されているとのことである[6]。

上述のように本書に収録されているフレーブニコフの露領アメリカに関する報告は，「ノヴオ・アルハンゲリスク」と「ロス植民地」の二部のみであるが，前者は露領植民地の最先端におかれた本拠地であり，後者はその後サンフランシスコ北方に設置された前哨基地であった。このために本書は露米会社においてもっとも外国と交渉の深かった部分を扱っているのである。ロシア人のシベリアおよびアリューシャンへの東進は僅かの原住民の抵抗を除けば殆んど無人の境を行く観があったが，アメリカ大陸では彼らは最初から原住民の頑強な抵抗に遭遇した。またスペイン・アメリカ・イギリス・フランス人との関係から以後その前進はヨーロッパの国際情勢に制約されるとともに，カリフォルニアではスペインの，また千島では日本の警戒に出会ったのである。それではまず露米会社の対外国人関係から本書をみてみよう。

フレーブニコフはシトカ島のノヴオ・アルハンゲリスク設置の理由について，カジヤク島周辺のらつこの減少によりさらに南東へ進出するための基地が必要であったことをのべ，これにはバラノフのロシア領拡大の政治的動機もあったことを指摘している（p. 2）。即ちそれは「英米人が原住民に銃砲をさえ提供している交易を妨げ，また彼らがロシア人

5) С. Б. Окунь の英訳書〈The Russian-American Company. Cambridge, Mass., 1951〉に寄せられた R. J. Kerner の序文。

6) С. Г. Федорова. Указ. соч., стр. 37.

の発見した場所に定着することを防ぐため」のものであった。バラノフ自身がのべているように，シトカ周辺にはロシア人進出の10年も前からすでに英米船が年に6～10回も到来し，この間に原住民との交易で少くみても10万枚にのぼる毛皮が搬出されていたのである。英米人の毛皮入手がコロシ族 (Tlinghit Indians) との物々交換で行なわれたのに対し，ロシア人のそれは多くがアレウト人を使役しての自らによる狩猟であった。従ってロシア人の進出と定着はコロシ族の利益を侵害するものであり，フレーブニコフが本書の至るところでのべているように，彼らは英米人から得た火器をもってこれに激しく反抗したのである。このためロシア人は英米人のアメリア北西岸への到来および原住民との直接交易を疑いの眼でみていていたが，一方彼らとの交易はロシア植民地の存立のために不可欠のものであった。即ち本国からの補給が困難なため，食料や物資の供給を外国船にあおがざるをえなかったのである。フレーブニコフは，1821年外国船の露領植民地到来の禁令が出されたときも，露米会社はカリフォルニアやハワイへ船を出して外国人との交易を続けざるをえなかったことを明らかにしている (pp. 57, 59)。外国船にとっても露領植民地は営利のために格好の場であり，彼らがロシア人と共同でらっこ猟に着手したことや，露米会社の委託を受けて広東で毛皮の売却をした実例ものべられている (pp. 11–13)。そのような外国人のなかには文化4年長崎に到来したアメリカ人オケインのように，対日交易を請負ったものさえいたのである (p. 11)[7]。

穀物の実らないアメリカ植民地への食料供給は露米会社のもつとも切実な問題であり，1803年ロシア最初の世界周航に出発した会社の最高責任者レザノフは，これを日本およびカリフォルニアとの交易樹立によって解決しようとした。しかし鎖国日本でおこったような事情は，カリフォルニアにおいてもある程度みられたのである。ここでもスペイン本国以外との交易は禁止されて一種の鎖国制度がしかれており，しかもスペイン人のカリフォルニアへの進出自体がロシア人のアメリカ大陸への出現に対抗するためのものであった[8]。これは幕府の蝦夷地開発との奇妙な一致であるが，スペイン植民地では蝦夷地とは異って本国との距離，とくにナポレオン戦争中のイギリスの海上封鎖のためロシア人との交易の可能性が残されていた。フレーブニコフの報告の中でもレザノフ以来のサンフランシスコとの交易樹立の試みとその実現が興味深く語られている (pp. 60–65, 113–116)。しかし露領アメリアにおいて食料自給に成功した唯一のロス植民地の存在が，皮肉にもスペイン人との交易発展の障害となったのである。

1812年に会社の責任で建設されたロス植民地は，その当初からサンフランシスコ当局の撤去要求をくり返し受けたが，このことについてフレーブニコフは，同地のインディアンがスペイン人から何の保護も受けておらず彼らを嫌っているとのべ，支配の及ばないサンフランシスコ以北へのスペインの領土要求が根拠のないものであることを強調している (pp. 126–130)。幕末のサハリンに対するロシア人の主張を思わせる見解である。1820年代

7) バンクロフトによれば，O'Cain はロシア国旗を掲げて長崎に入港したが，オランダ商館員の抗議でアメリカ国旗にとりかえたという (H. Bancroft. History of Alaska; 1730–1885. San Francisco, 1886. pp. 478–9)。わが国の史料では，アメリカ船は単に食料と薪水の補給のため立寄ったことになっている（通航一覧　国書刊行会刊本　巻322，237–241頁）。

8) J. R. Gibson. op. cit., pp. 8–9.

初頭のスペイン革命やメキシコの独立に関連して，サンフランシスコ地方の合法的獲得がロシアにおいて検討されたことは，オークニの研究において詳細であるが[9]，ロシアは遂にロス植民地をさえ国際的に認めさせることができなかった。ロスを拡大して全露領アメリカへ穀物を供給することの可能性を信じた著者は，「インディアンの酋長から平和的に購入し，すでに20年も他から苦情なく占有してきた」ロス植民地をメキシコ政府に承認させる努力の必要なことを訴えている (p. 133)。そこには常にヨーロッパ政策の犠牲に供された露領アメリカの現地責任者の悲痛な叫びを聞くことができる。この時期にはロシアはすでに露米，露英条約によって北米の領有を制約され，合衆国のコロンビア河進出によってロス植民地自体が脅威にさらされていたのである。ハワイを占有しようとしたバラノフの試みも露米会社史のなかでとくに興味あるエピソードであるが，本書においては僅かな言及しかみられない。

シトカおよびアメリカ北西岸の原住民コロシ族について，フレーブニコフは彼らの中に伝わる説話や風俗習慣について数ページながら興味ある叙述をしている (pp. 24–33)。彼はのちに民族学に対する貢献により科学アカデミーの通信会員に推されただけあって，本書にもその片鱗があらわれている。ここではコロシ族における奴隷の存在，ロシア人への彼らの売却や賃借，女奴隷の売春なども語られている。しかし著者にとってコロシ族は単なる民族学的な観察の対象ではなく，ノヴオ・アルハンゲリスクを脅かす危険な存在であった。彼は「原住民コロシ族は2度の戦いに敗れて以来われわれの恐るべき敵となった。彼らは復讐の念に燃えており絶えず機会をうかがっている」とのべ，もしヨーロッパ列強との戦争が始まった際は腹背に敵をもつことになり，「残された唯一の道は満足のゆく条件を期待して文明的な敵に降伏することである」と告白している (pp. 100–101)。要塞の近くでは日夜注意深い警戒が行なわれ，堡塁や船舶の大砲は常時装塡されて，シトカだけでも守備のため100人の余分な人員を必要としたのである (pp. 102, 106)。ロシア人は露米会社の本拠地シトカ島の原住民さえ支配できず，彼らの反抗は最後まで続けられた。「彼らは，われわれが先祖の土地を奪い，彼らから狩猟の利益をとり上げ，最良の漁場を利用していると主張している。他方われわれは彼らに交易で利益をうる機会を与え，彼らに必要なものを供給し，芋を植えてこれを食べることを教えた等々と考えている」(p. 101) というフレーブニコフの記述は，前半と後半のいずれに力点をおくべきものであろうか。

いま一つの原住民アレウト人の場合はコロシ族とは事情が全く異っていた。ベーリング探険隊ののちアリューシャン列島に奔流したロシア人に征服されたアレウト人は，彼らの従順さとらっこ猟の巧みさのために忽ち鵜飼いの鵜のような役割を負わせられたのである。彼らはロシア人の前進とともに強制的に遠くの島々へ移住させられ，夏期は皮舟で数ケ月の遠洋航海に従事した。しかも悪天候やコロシの襲撃で命をおとし，またスペイン人に捕われるのは主に彼らであった。フレーブニコフは1822年支配人ムラヴイヨフが第2次特許状にもとづいて出した最初のアレウト人規制の指令を説明しつつ，いずれにしてもアレウト人は「無償で働かされることはない」とのべている (p. 50–51)。この記述からは時期遅れの季節に家族の冬季の食料として魚を貯蔵せねばならず，しかも会社に対して常

9) С. Б. Окунь. Российско-Американская Компания. Москва-Ленинград, 1939, стр. 123–132.

に負債を負いその桎梏から逃れられなかった実情はくみとれない。却って著者はシトカのアレウト人の怠惰とぜい沢品への嗜好を嘆き，彼ら本来の生活様式に戻ることをのぞんで次のように書いている。「他の植民地ではアレウト人は鳥皮のパーカを着ているが，これは暖かで気持よく魅力的である。しかしシトカでは彼らは兵士用の布で作った服などには目もくれず，純毛を好み，フロックコートやドレスコートを着ている。このぜいたくさは彼らにとっても植民地にとっても有害である」(p. 105)。このようにしてアレウト人はパンや紅茶などの「ぜい沢品」を制限されたのである[10]。

フレーブニコフは労働者 (промышленники) の給与を従来の毛皮収穫高にもとずく分配から貨幣の固定給に改めたハーゲメイステルの改革についてのべ，これが労働者との協定でおこなわれた事実を明らかにしている (p. 21)。著者はこれが殆んど反対なしで実施されたというが，実質的な給与引下げと将来の見通しをめぐって労働者の間に動揺があったことは，「良識ある者には，新たな制度が従来のものより安定しかつ有利であることが後には理解された」という彼自身の記述からも想像されるところである。労働者の雇傭条件についての 1820 年の規定はその全文がのせられているが (pp. 42-43)，どのような階層のものがいかにして植民地に運ばれたかにはふれられていない。概してフレーブニコフの報告は労働者や原住民の生活状態についての記載に乏しく，法的奴隷身分のカユル (Каюры) には殆んどふれていない。これを知るためには同時代の見聞者[11]の証言を照合することが必要である。ただ，1826 年現在で給与を受けた 400 人の会社に対する負債が 15 万ルーブルにのぼることが記され，「大抵のものはこれを完済しようという考えもなく，いたずらに負債を増したので彼らの給与は極めて僅かである」(p. 87) とあるのをみても，労働者が 7 ケ年の満期の後も植民地に緊縛された一種の農奴であった実態が推定できる。

ロシア人と原住民女性との混血であるクレオル (Креолы) は露領アメリカの特殊な階層であった。ロシア人労働者の不足のため会社はロシア人と現地女性の婚姻を奨励し，婦女暴行をさえ黙認して混血児の増加をはかったのであり，クレオルは例外なく会社の費用で教育を受けたのである。彼らは 16～29 歳まで勤務の義務を負い，会社にとって有力な労働者の補給源であった。フレーブニコフは，レザノフがクレオルの教育によって将来の兵士・農民・工匠・手代・書記そして管理者の養成をさえ期待した夢をふり返りつつ，「それでは教育は何をなしえたか」と自問している。彼によれば，彼らは基礎教育の不充分さのためロシア人の善行の原理は理解しても，実際には悪行を模倣したのである。かつて造船や航海術を学ぶためペテルブルクへ送られた幾人かのクレオルたちは，「同時にぜいたくと悪癖をも身につけて帰ってきた」(p. 49)。しかし著者も当地で実地教育を受けている者の中から技術者が育ちつつあることを認め，「すべての世代が成功裡に養育され，会社および祖国の利益となることを」希望している。

本書が会社理事会への報告である以上，その主要部分が植民地の経営状態にあてられて

10) С. Б. Окунь. Указ, соч., стр. 185.

11) 例えば日本にも関係の深い Н. П. Резанов, И. Ф. Крузенштерн, В. М. Головнин, Г. И. Давыдов, G. H. Langsdorff のほか，И. Е. Вениаминов, Ф. П. Врангель, А. И. Завалишин, Л. А. Загоскин, Ф. П. Литке, Ю. Ф. Лисянский, А. П. Лазарев, J. D'Wolf, O. v. Kotzebue などは，いずれも露領アメリカの社会状態について貴重な証言を残し，その多くは露米会社の施策を厳しく批判している。

いることは当然である。バラノフの更迭に立会ったフレーブニコフの最初の仕事は，バラノフ時代の業務と資産の総点検であった。すでに20年におよぶバラノフの独裁的経営の悪評は，本国のみならず外国人にも知れわたっていたが，著者も「バラノフが国家や会社に尽した重要な貢献を侮辱するわけではないが，晩年の彼は事業に表面だけの注意しか払わず，有能な助力者もいなかったので彼自身事業の不振を認めた」と記している (p. 15)。かくてこれ以後植民地の支配人の地位は海軍軍人に委ねられ，フレーブニコフは実務の専門家として経営の改革を助けたのである。著者は，バラノフ後の支配人たちの時代に事務が秩序をとり戻して会計も明確となり，荒廃を極めていた全ての建物も面目を一新した経過をのべている。本書には，植民地の人口構成・狩猟数・対外国人貿易・商品価格・植民地の物価・売店売上額・資産評価・生産利益と支出・ロス植民地の作物別収穫量・家畜別頭数その他多くの統計がのせられており，植民地企業の経営状態の概観をみることができる。また狩猟のほか鍛冶・金属細工・造船・建築・ろうそく製造・皮革その他の実際の作業についての記述は，植民地の自給体制のある程度の完備を思わせるものである。しかし会社がもっとも力をいれたシトカやロス植民地での造船は，結局はアメリカ人からの購入の方がコスト安で性能もよいことが分ったためやがて中止された[12]。フレーブニコフによれば，「これらの造船はカリフォルニアの不活発なスペイン人にある程度の尊敬を抱かせる以外に何の実利もなかった」のである (p. 117)。

外国船やカリフォルニアからの食料購入は国際情勢悪化の場合にあてにならぬものであったので，著者は食料自給の努力についても語っている。ノヴオ・アルハンゲリスクでは魚も主食であり，春から秋まで鰊・鮭・鱒・おひよう・鱈などが大量に塩漬されたほか，芋の栽培や豚・鶏の飼育も試みられた。ロス植民地はもともと狩猟の前進基地として設立されたが，やがて農業が主業となり居住地の周辺はくまなく開墾され，かなり大規模な牧畜や園芸も行なわれた。その収穫の多くはシトカに送られ，また到来する船舶に供給されたのである (p. 121)。しかしロス植民地の欠点は土地が狭いことであり，著者はボデガ湾近傍の草地まで領土を拡大することによってアメリカ植民地のみならず，カムチャッカやオホーツクへの穀物供給も可能なことを力説している (p. 131)。

本書ではこのほかクレオル児童の学校，シトカの図書館，診療所などの社会施設についても触れているが，華麗な建物を有した教会の活動について殊んど何の言及もみられないのは驚くべきことである。フレーブニコフは「コロシ族の言語を解する賢明な布教師が，彼らに神の言葉を伝えることは，その開化に役立つであろう」とだけのべているが，彼もレザノフと同様に，原住民の中に入ってゆこうとしない正教僧侶に不信を抱いていたのかもしれない。

以上フレーブニコフ報告の内容をかいつまんで紹介したが，本書は露領植民地の諸問題について他にはみられない貴重なデータを提供している。このことは当時露米会社の事情にもつとも精通していた著者にして始めてなしうることであった。しかし露米会社の能吏であった著者の立場からして，会社に不都合なことに触れていないことは当然であろう。すでに彼はカムチャッカ在勤中，バラノフに対して暴動を企てた労働者たちが送還されて

12) シトカの造船はその後復活し，19世紀50年代には蒸気船さえ造られていた。

きたとき，彼らの公開裁判は会社に害を与えるとして事件のもみ消しを理事会に進言したほどである[13]。この点で本書は，会社の史家チフメニヨフの著書[14]と同様な弱点をもっているということができる。

原書は，これまで未刊の部分も含めてソ連やアメリカの少数の専門家によって引用されてきたが，現在ではすでに稀覯書に属しわれわれの利用は殆んど不可能であった。それ故この英訳の刊行は露領アメリカ研究に対する大きな寄与である。これはオレゴン歴史学会の〈North Pacific Studies〉シリーズの第2冊目にあたり，これに引続きフレーブニコフ報告の未刊の部分がソ連地理学協会文書館所蔵の草稿から翻訳刊行されることになっている[15]。本書中にも付録としてフレーブニコフ資料から8つの未刊資料が付せられており，この問題についてのアメリカ人研究者に対するソ連の協力ぶりをうかがわせるものである。共訳者のドミトリシンはポートランド州立大学教授で〈Moscow and the Ukraine, 1718-1953〉そのほか多数の著者をもつロシア史の権威であり[16]，またクラウンハート・ヴォーガン女史は本シリーズの第1冊であるクラシェニンニコフの「カムチャッカ誌」(最初の英語完訳)[17]の訳者である。訳文の厳密さは原書との照合ができないため判断できないが，かなり読み易い英文となっている。英語に訳し難い言葉や度量衡などは翻字のまま用いられており，巻頭でそれらの説明がなされている。31枚にのぼる図版は，レニングラードの人類学民族学博物館所蔵のヴォズネセンスキーによるシトカやロス植民地のスケッチ画11枚のほか，H. エリオットによるアレウト人のらっこ狩猟図や古地図，写真など珍らしいものばかりで本書の価値を一そう高めている。全体に解説・付録・索引・参考文献のいずれをみても行きとどいた配慮の感じられる本である。

本書の紹介を終えるにあたり，露領アメリカと日本の関係について一言しておきたい。わが国ではこの分野の研究はこれまでのところ著しく遅れているが，鎖国時代の日本に対するロシアの接近の理解は露領アメリカの実態と露米会社の政策を抜きにしては考えられないものである。またわれわれは露米会社とスペイン領カリフォルニアの関係を日露関係と比較することによって，ロシアの対日意図をより深く考察することができるであろう。日本人も漂流民の形でノヴオ・アルハンゲリスク（シトカ）とは浅からぬ因縁をもっていた。尾張の漂流民は有名なバラノフの歓待を受けたし，越後や越中の水夫らも一時は同地に滞在してロシア人の世話を受けたのである。「船長日記」，「蕃談」，「時槻物語」[18]などは当時のシトカについて興味ある証言を含んでいる。19世紀初頭の露米会社のウルップ島移

13) С. Б. Окунь. Указ. соч., стр. 179-180.

14) П. А. Тихменев. Историческое обозрение образования Российско-Американской Компании и действий ее до настоящего времени. ч. I, II. СПб., 1861-63.

15) フレーブニコフ報告書の未刊の部分は，①カジャク島，②ウナラスカ島・アラスカ半島・フォクス諸島，③アトカ島・アンドレアノフ島・コマンドルスキー諸島とその周辺，④プリブイロフ諸島・セイントマシュー諸島・北米沿岸の4部である。

16) つい最近も Prentice-Hall 社から同教授の〈A History of Russia〉が出版された。

17) S. P. Krasheninnikov. Explorations of Kamtchatka: North Pacific scimitar. Tr. with introduction and notes by E. A. P. Crownhart-Vaughan. Portland, Oregon Historical Society, 1972.

18) 船長日記（異国漂流奇譚集，海事史料叢書第5巻，日本庶民生活史料集成第5巻所収）；蕃談（東洋文庫39，日本庶民生活史料集成第5巻所収）；時槻物語（日本庶民生活史料集成第5巻所収）。

民の退去事情についても日本には詳しい史料[19]が残っており，今後の露米会社研究への日本人の寄与も充分に考えられるところである。

19) たとえば，「休明光記」巻3，7；「休明光記付録」巻3，4；「休明光記遺稿」巻4（以上いずれも新撰北海道史第5巻所収）；「通航一覧」巻319など。